

昔むかし、ラ・レアールに、ひとりの修道院長がいました。のんびりした人で、おそろしいほど太っていました。しかも、日に日に太っていききました。

ある日のこと、修道院の前の道を、王さまが通りかかりました。王さまはやせていて、さとうきびよりもほっそりしていました。王さまは、修道院長を見て、声をかけました。

「いったいまだどうして、あなたはそんなに太っていて、わたしはこんなにもやせているんだらうね」

修道院長は答えました。

「王さま、それは、あなたがいつも頭痛に苦しめられているからです。だからそんなにやせているんです。わたしなら、頭痛なんて、かんたんに追っばいますよ」

王さまは、頭痛がどんなにいやなものか知っていたので、こののんきな修道院長に思い知らせてやりたいと思いました。そこで、しばらくおしゃべりした後、別れぎわにこういいました。

「修道院長よ。あなたは、頭痛におそわれることはないということだ。そこで、問題を三つ出そう。三日のうちに答えを持つて城にくるように。第一問。一番上等の服を着たわしは、どれほどの値打ちがあるか。第二問。馬が世界をぐるりと一周するのに、どれくらいの時間を要するか。第三問。わしは何を考えているか。これらの問題に答えることができたなら、あなたの体重と同じ重さの金貨をあたえよう。もしも答えることができなかったら、あなたが愚か者であると、世間に触れてまわるぞ」

そういうと、王さまは立ち去りました。

修道院長は、口もきけないほどこまり果てました。考えに考え、しまいに頭痛におそわれ、頭ががんがん痛みだしました。眠ることさえできません。修道士たちは心配して、「いったい何が起こったのですか」とききました。けれども、修道院長は、

「たのむ。静かにしてくれ」というばかりです。

二日目、とうとう、修道院長は、がまんしきれず、修道士たちにいいました。

「王さまが、わしに三つの問題を出したのだ。それを三日のうちに答えなければ、わたしは世間の笑いものになるのだ」

そして、一番上等の服を着た王さまはどれほどの値打ちがあるか、馬が世界を一周するのにどれくらいの時間を要するか、王さまは何を考えているか、という三つの問題を話しました。

修道士たちは、とほうに暮れていいました。

「修道院じゅうの人を集めてきいてみましょう。ひとりぐらい、この迷路から抜け出す方法を知っているかもしれません」

三日目、修道院長は、修道院じゅうの人々を集めて、王さまから与えられた三つの問題のことを話しました。けれども、だれひとり口をきくことすらできませんでした。すると、若い料理人が立ちあがっていいました。

「ちょっとお話してもいいですか」

「役に立つことなら、なんでもいつてくれ」と、修道院長はいいました。

「では、申します。わたしはこの三つの問題に答えられると思います。ただし、条件がひとつあります。それは、院長さまの服をわたしにゆずってくださいることです」

周りの人たちは大笑いしました。料理人は骨と皮ばかりにやせていて、かげがほとんどできないほどののに、丸々と太った修道院長の服を着るなんて。

朝になると、料理人は、修道院長の服を着て、王さまのお城に向かいました。服はだぶだぶで、後ろに引きずって歩いて行きました。服の中に、料理人があと三人、入れそうなほどでした。

お城に着くと、料理人は、門番に、

「ラ・レアルの修道院の者です」といいました。

王さまは、

「そいつは、修道院長にちがいない。ここへ連れてまいれ」といつて、いちばん上等の服を着て、王のいすにすわりました。

料理人が入ってくると、家来たちは、口々に、

「修道院長は、自分の体よりはるかに大きい服を着ているぞ」といいました。王さまは、にんまり笑って、

「だまれ。あれから三日がたったのだ。あのときは、みごとに太っておったが、答えを考えているあいだにこんなに干からびたのだ」といいました。そして、心の中で、

（頭痛がどんなにいやなものか、思い知っただろう。いい薬だ）と思いました。

王さまは、修道院長になりました料理人にいいました。

「さて、第一問の答えは何だ。この服も含めて、わしはいつたい、どれほどの値打ちがあるかね」

「銀貨二九枚です」

王さまも家来たちも、びっくりして飛びあがりました。

「なんだと、たった銀貨二九枚の値打ちしかないというのか」

「はい、その通りです。銀貨二九枚であつて、それ以上ではありません。なぜなら、ユダは銀貨三〇枚でイエス・キリストを売りました。イエスさまより以上の値打ちが、王さまにあるはずがありません」

王さまと家来たちは、口をぱたんと閉じて、首をぐるぐる回しました。

「では、第二問だ。馬が世界を一周するのにどれくらいの時間を要するかね」

「馬が太陽と同じ道を進めば、ちょうど二十四時間で世界を一周できるに決まっているではありませんか」

王さまと家来たちは、また何もいえず、立ちすくんでしまいました。

けれども王さまは、第三問には勝つ自信がありました。他人の考えていることを見すかすなんて、だれにできようかと、王さまは思いました。

「では、第三問。さあ、この瞬間に、わしは何を考えているかね」

「もちろん、王さまは、わたしがラ・レアルの修道院長であると、考えておられます」
「当たり前だ。おまえが、ラ・レアルの修道院長以外のだれかだなんて、考えられないじゃないか」と、王さまはどなりました。

「では、申し上げましょう。わたしは、修道院の料理人でございます」

料理人はそういつて、修道院長の服をするりとぬぎました。みんなはあつけにとられました。どこから見ても、それは料理人でした。家来たちはいいました。

「王さま、わたしたちはみんな、この男が修道院長だと考えておりました。王さまの負けでございます」

王さまは、笑っていいました。

「この男はみごとに答えよった。だが、こいつがやせていてよかった。もしほんとうの修道院長だったら、金庫がからっぽになるところだった」

みんなはすぐに金庫に行き、料理人と同じ重さの金貨を計りました。そして、それを大きなごに入れて、修道院まで運びました。料理人は、復活祭の朝のように晴れやかな顔で、いっしょに帰って行きました。もし死んでいなければ、今もやっぱり生きています。

それからというもの、王さまは、修道院のだれにも、難題を出す気はさらさらありませんでしたとき。

さあ、さあ。求める者は、見出すよ。

* ラ・レアル 地名

* 修道院 キリスト教会の神を信じる人たち（修道士や修道女）がいっしょに生活をする場所。

原話…『世界の民話29 マヨルカ島』竹原威滋訳／ぎょうせい
再話…村上郁